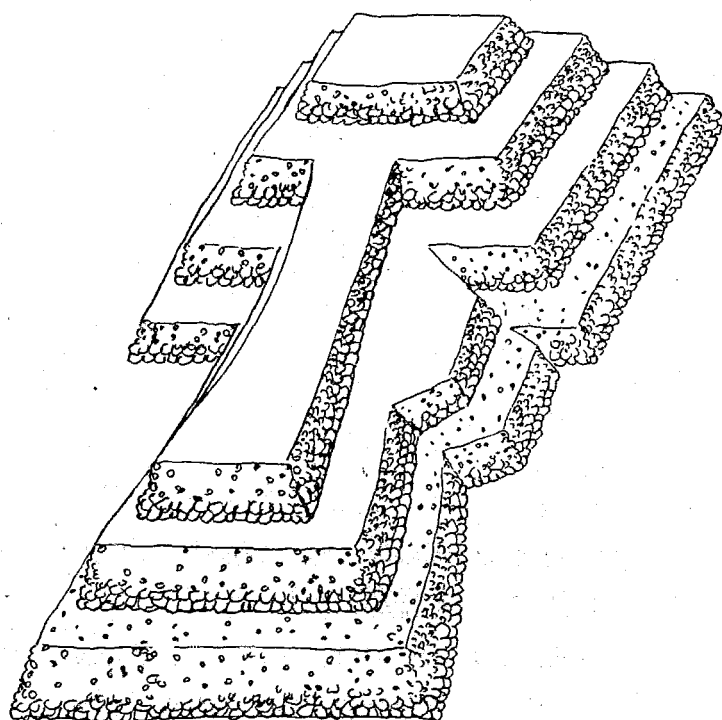


西求女塚古墳

第12次調査 現地説明会資料



2001年5月20日

神戸市教育委員会

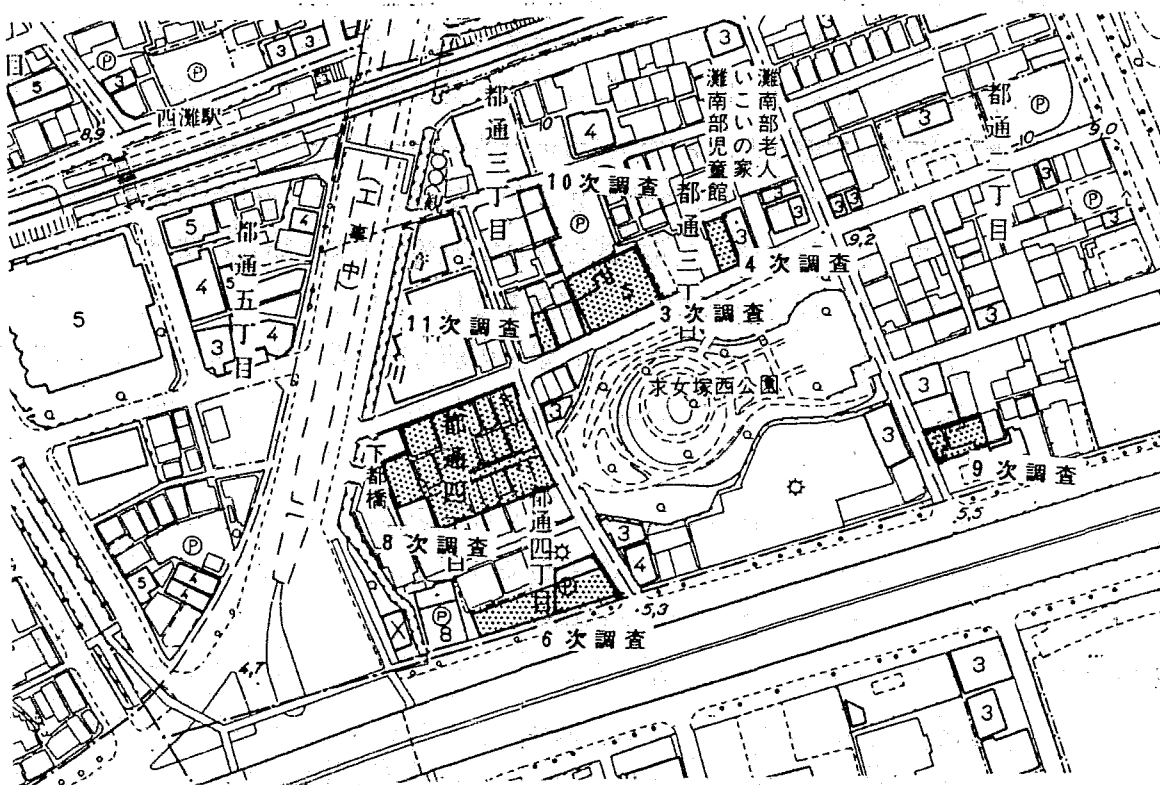
今回の調査につきましては、神戸市文化財保護審議会委員
和田 晴吾先生ならびに産業技術総合研究所 主任研究員
寒川 旭先生に御指導いただきました。
また、調査にあたっては、建設局 東部建設事務所ならび
に灘 南部自治会の御協力をいただきました。

はじめに

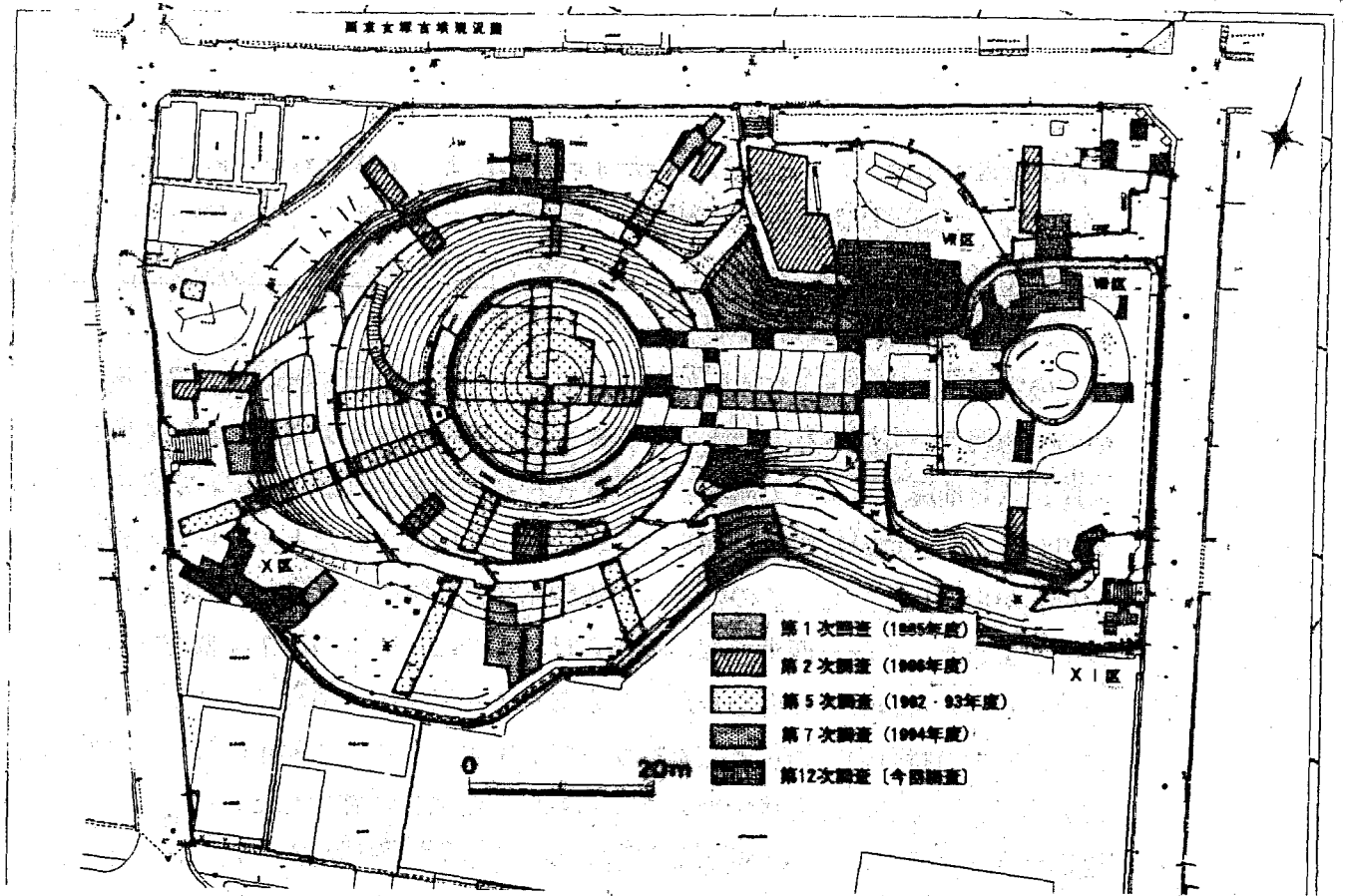
西求女塚古墳は、六甲山より流れだす西郷川によって運ばれた土砂によって形成された、扇状地と呼ばれる微高地上に築かれています。古墳時代の海岸線からは100 mほどしか離れておらず沖合を通る船などからも、その雄姿がはっきりと認められたと思われます。

この古墳は、1985年より4回にわたって、古墳の規模や構造を確認するための確認調査が実施されています。特に1992・93年の第5次調査においては、「慶長伏見地震」によって崩壊した竪穴式石室が確認されました。石室とその周辺からは、三角縁神獣鏡7面を含む、中国から輸入されたと考えられる青銅鏡11面が出土しました。この他にも、鉄製品など多数の副葬品が一緒に納められていました。これで西求女塚古墳からは、すでに1985年の第1次調査でみつかったものと合わせて12面を数えることとなりました。また墳丘やその周辺からは、山陰地方特有の土器などもみつかっています。さらに1994年の第7次調査においては、くびれ部と後円部と考えられていた部分で確認した石列によって墳形が従来考えられていた前方後円墳ではなく前方後方墳であったこと、北側のくびれ部に張出部のあることなどが判明しました。

このように、調査のたびに次々と謎のベールを剥がされていく西求女塚古墳ですが、今回は、いままで比較的調査していなかった前方部と、未確定である後方部西辺のようすを調べるために、2001年2月より調査を実施しています。



西求女塚古墳位置図



西求女塚古墳 調査区

(「西求女塚古墳 — 第5次・第7次発掘調査概報」より)

周辺の遺跡

西求女塚古墳の立地する穴甲山南麓の東部周辺には、この古墳とともに菟原姫女の悲哀伝説に登場する姫女塚古墳と策求女塚古墳をはじめヘボソ塚古墳、阿保親王塚古墳などの大型の前方後円墳・円墳が存在します。

これらの古墳のうち、姫女塚古墳は、前方部を南に向けた全長70mほどの前方後円墳で、後方部の埋葬施設の他に前方部に小型の箱式石棺がみつき、西求女塚古墳と同様山陰系の土師器が出土しています。

また東求女塚古墳は、全長80m以上の前方後円墳と考えられ、明治の中頃には破壊された墳丘から三角縁神獣鏡をはじめとする青銅鏡6面が出土したことが知られています。

ヘボソ塚古墳も破壊されて現在はその姿を目にすることはできませんが、全長約65mの前方後円墳で三角縁神獣鏡などが出土し、朱の塗られた竪穴式石室が存在していたことが判っています。

一方、これらの古墳に伴う集落については、まだよくわかっていません。とくに西求女塚古墳の付近では同時代の大きな集落は発見されておらず、少しはなれた日暮遺跡や篠原南遺跡などで数棟の竪穴住居址が見つまっているくらいです。



西求女塚古墳周辺の弥生・古墳時代の主な遺跡(S=1/3000)

番号	遺跡名	時代	内容	番号	遺跡名	時代	内容
1	大石東遺跡	古墳前・中期	集落	8	滝ノ奥遺跡	弥生中期	集落
2	篠原南町遺跡	古墳前期	集落	9	赤塚山遺跡	弥生中期	集落
3	都賀遺跡	弥生中・後期	集落	10	荒神山遺跡	弥生中期	集落
4	篠原遺跡	弥生後期	集落	11	郡家遺跡	弥生後期	集落・古墳
5	伯母野山遺跡	弥生中期	集落			古墳前～後期	
6	桜ヶ丘B遺跡	弥生中期	集落	13	住吉宮町遺跡	古墳中・後期	集落・古墳
7	十善寺古墳群	古墳中・後期	古墳	14	西岡本遺跡	古墳後期	古墳

周辺の遺跡

(「西求女塚古墳 — 第5次・第7次発掘調査概報」より)

調査の成果

VII区・VIII区

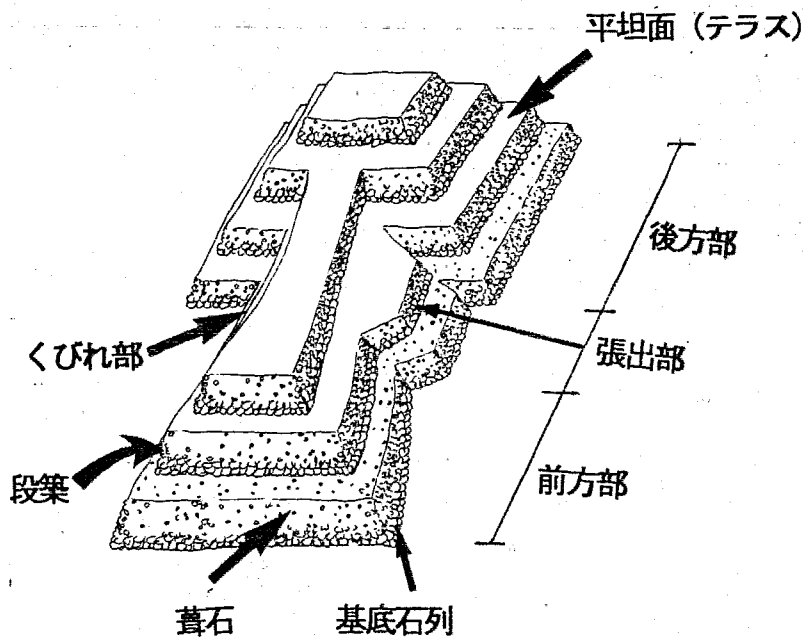
前方部北側の斜面の調査区（VII区）では、墳丘の外郭（墳丘裾）と1段目の平坦面（テラス）および2段目への基底石列・葺石が確認されました。

墳丘裾は、中世の耕作によって部分的に削られているもののほぼ原型をとどめるものと考えられ、東西約12mにわたって確認されました。1段目に造られた平坦面までは1m前後の墳丘が盛られています。平坦面の幅は0.9～1.4mあり、さらに30～40cmの基底石列を並べてその上に葺石が積み上げられていました。この平坦面の東側には、拳大の石が敷かれていることもわかりました。

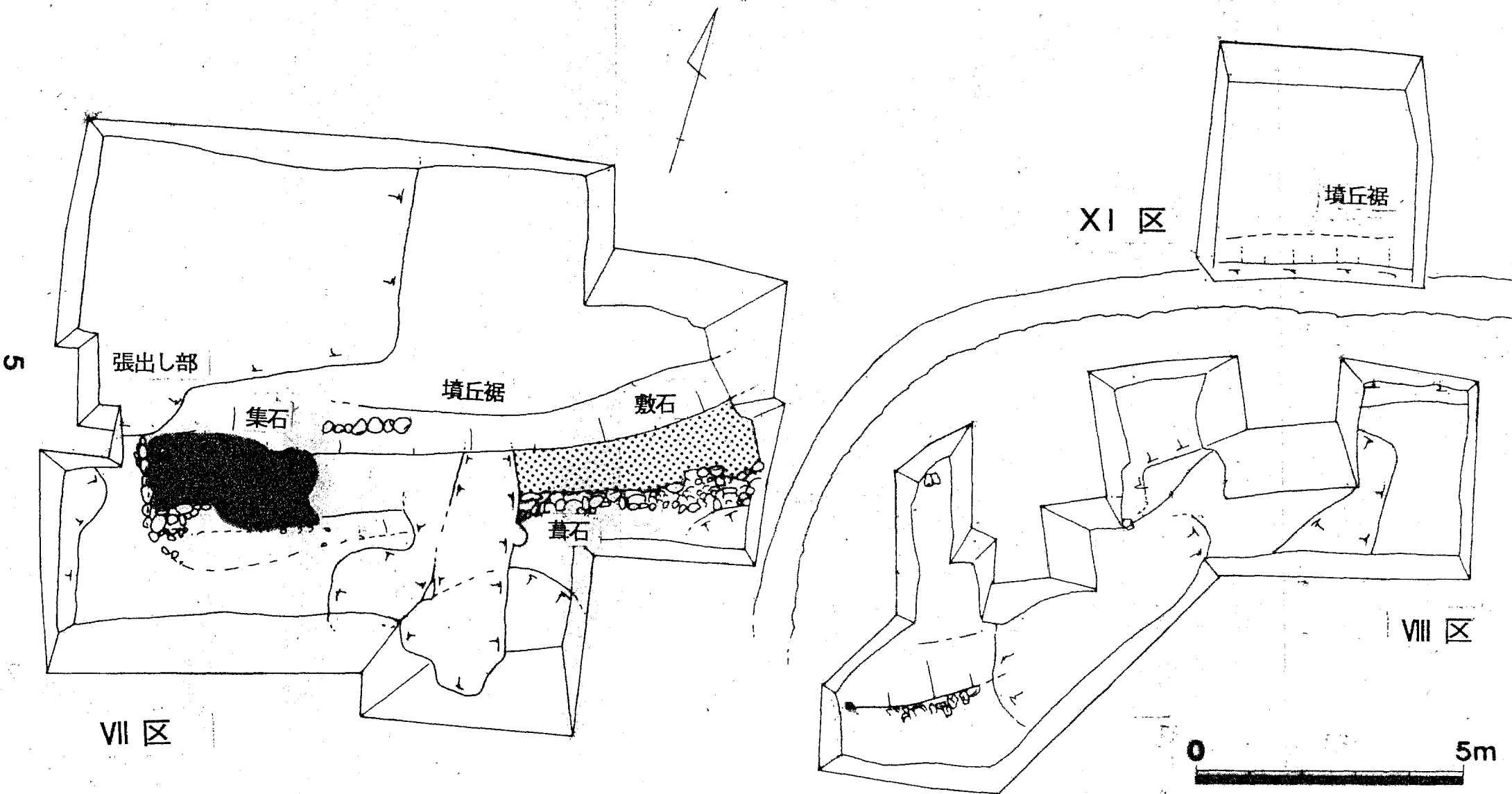
このように検出された前方部の形状は、従来考えられていたように直線的に広がっているものではなく、先の方ほど両側を開く「撥形」とよばれる形になることが判明しました。「撥形」とは、三味線を弾くときに用いる撥の形状に似ていることから呼ばれているものです。

また西側のくびれ部に近い部分では、平坦面の基底石が北側に折れ曲がり延びているようすが、前回の調査に引き続き確認されました。1段目の基底石から2mほどで後世の削平にを受けているため詳しい形状は不明ですが、張出部や渡り臺と呼ばれる施設が存在したものと考えられます。

さらに、VII区の西側の前方部の墳頂部付近（VIII区）は、明治になって建てられた別荘によって大きく削られていると考えられていましたが、階段状に盛られている墳丘の3段目と推定される石列が検出されました。



前方後方墳 細部名称



VII - VIII - XI 区 平面図

X区

また後方部の調査区（X区）では、墳丘の西辺と考えられる基盤層の削り込みが約5mにわたり確認されました。墳丘の盛土部分については前回の調査と同様、大規模な地滑りによって大きく崩れていました。この地滑り痕は、1596年に発生した「慶長伏見地震」によるものです。今回発見された地滑り痕は非常に鮮明で、古墳の築造時にブロック状に積み上げられた盛土がちょうど「ダルマ落とし」のように水平に移動して中世の田んぼの上に乗った状況が観察されました。

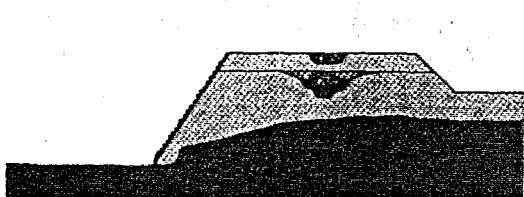
まとめ

今回の調査においては、前方部の形状と段築、未確認であった後方部の西辺などが新たに確認されました。

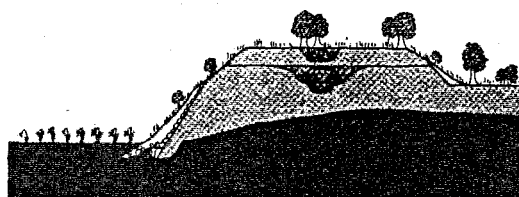
撥形の前方部は、奈良県桜井市の箸墓古墳や天理市の西殿塚古墳といった3世紀後半の非常に古い出現期の古墳に共通する独特な墳型です。また3段の段築も同じように古い古墳の特徴であり、今までに出土した青銅鏡などの遺物とともに西求女塚古墳が全国的にも古墳時代の早い段階で築かれた古墳であることが確認されました。

もうひとつ、後方部の西辺と南東隅で墳丘が確認されたことにより、西求女塚古墳の全長は98m以上であることが判明しました。

今後これらの発掘成果をもとに、西求女塚古墳の本来の姿を、よりいっそう詳しく明らかにしていきたいと考えています。



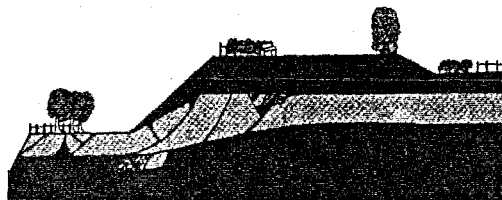
1. 西求女塚古墳が造られる



2. 墳丘の一部が崩れ、古墳の周囲が中世に水田となる。



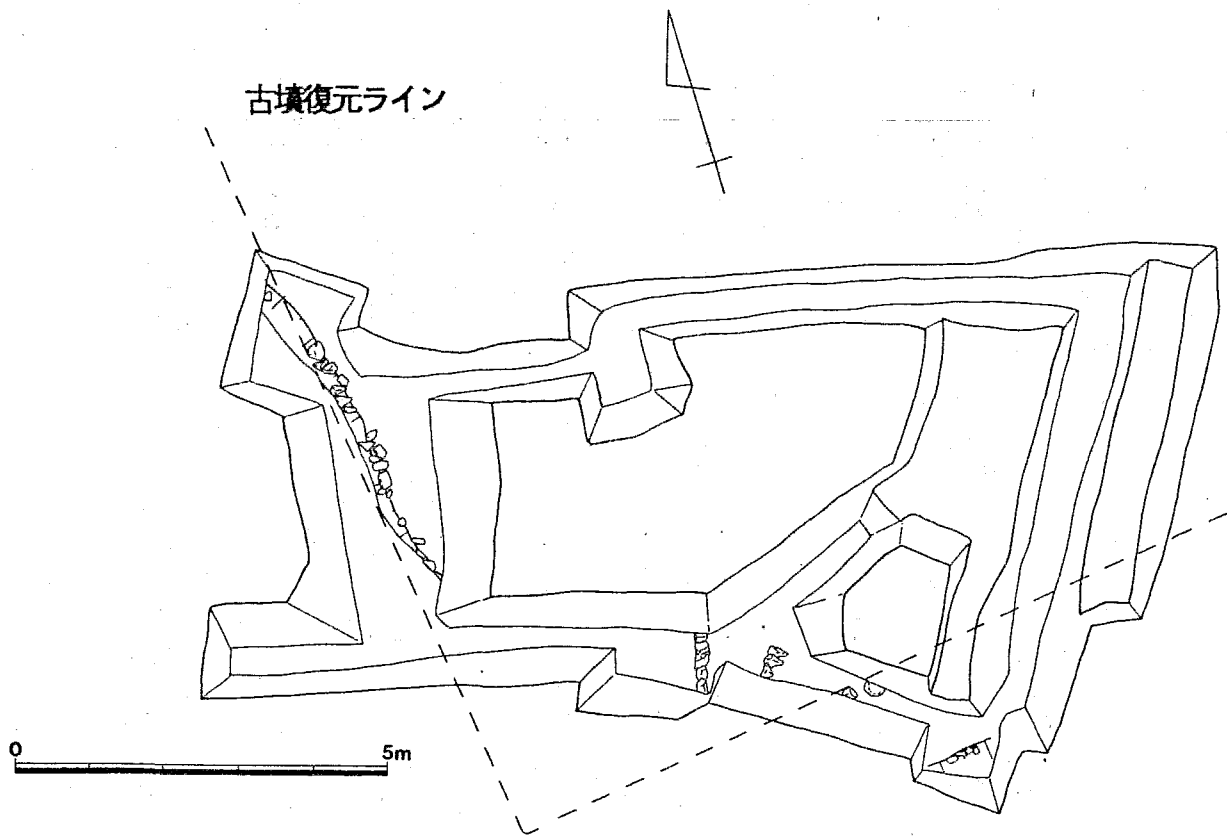
3. 1596年の大地震で墳丘が地滑りを起こす。中世耕土の上に墳丘盛土が滑る。中世耕土には急激に圧力がかかり覆った盛土を貫いて砂が上昇する。



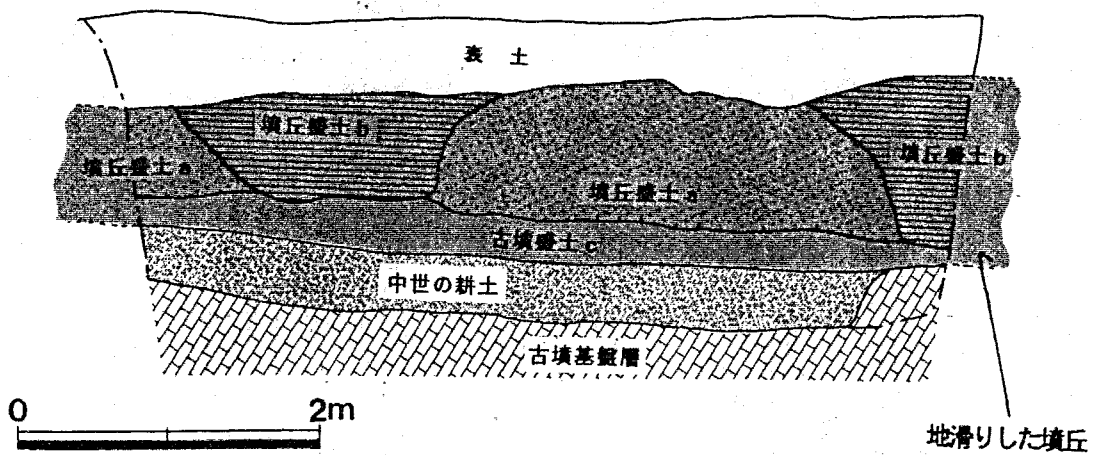
4. 墳丘が造作・削平され、公園となり現在に至る。

墳丘の現在までの経過

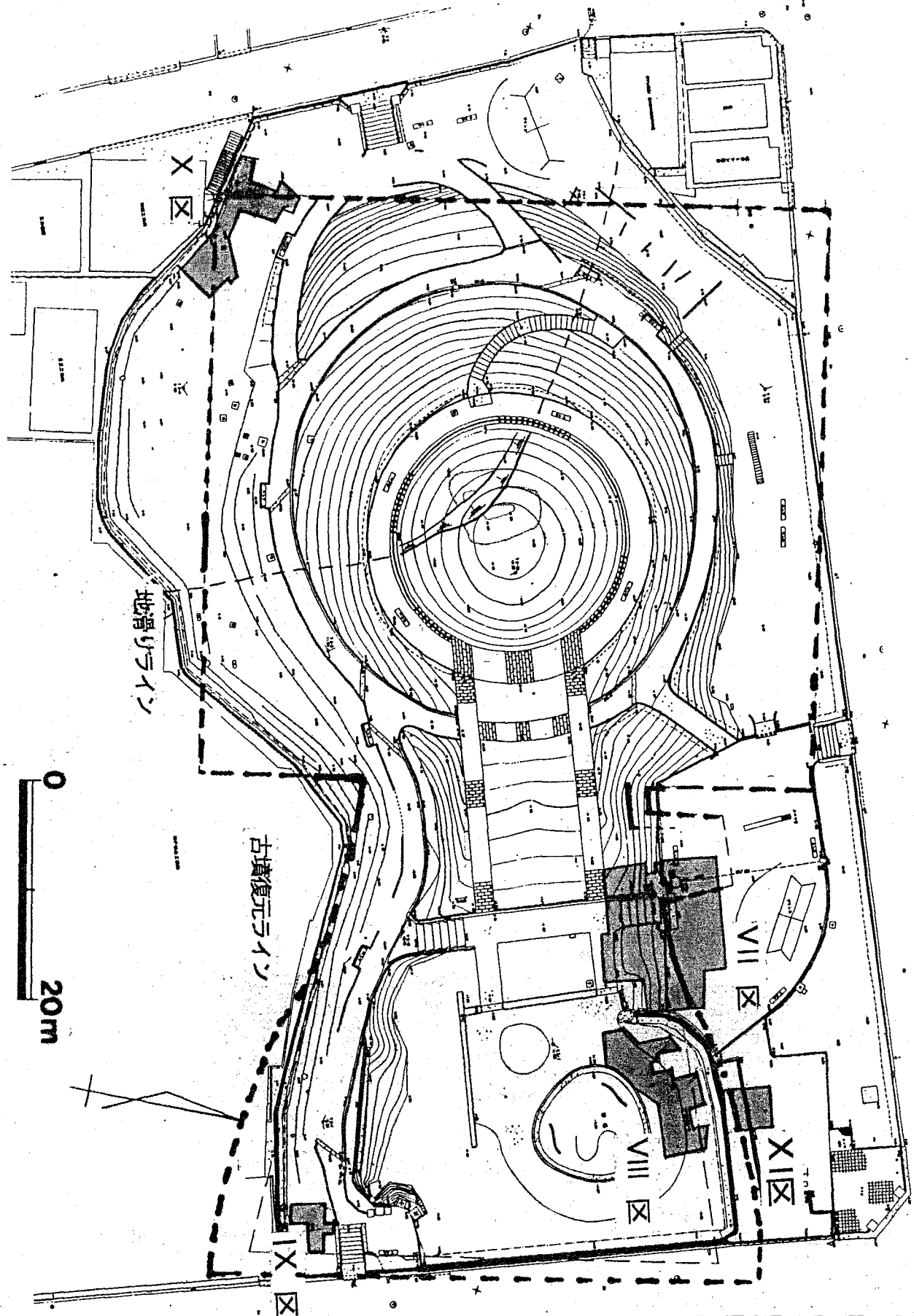
（「西求女塚古墳 — 第5次・第7次発掘調査概報」より）



X区 平面図

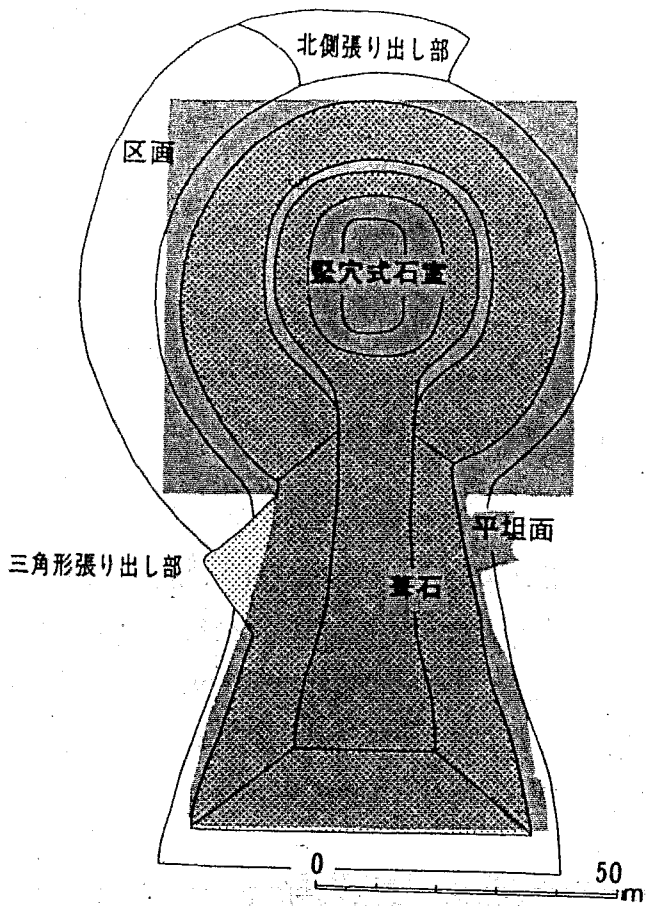


X区 地滑り痕 模式図

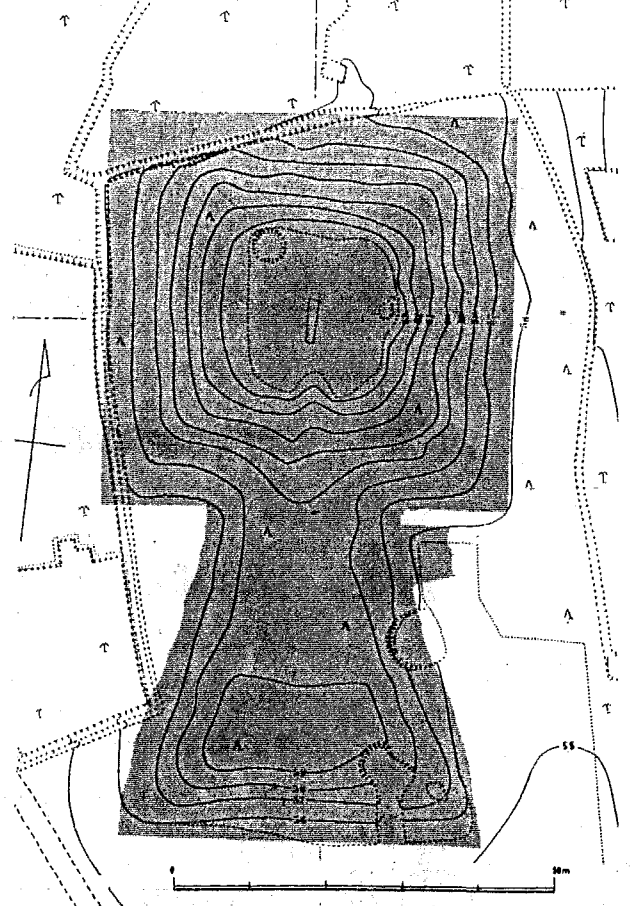


西求女塚古墳の規模			
全長	9.8 m 以上		
前方部長	4.5 m 以上	後方部長	5.3 m
前方部幅	(5.0 m)	後方部幅	5.6 m
前方部高	3~4 m	後方部高	1~1 m

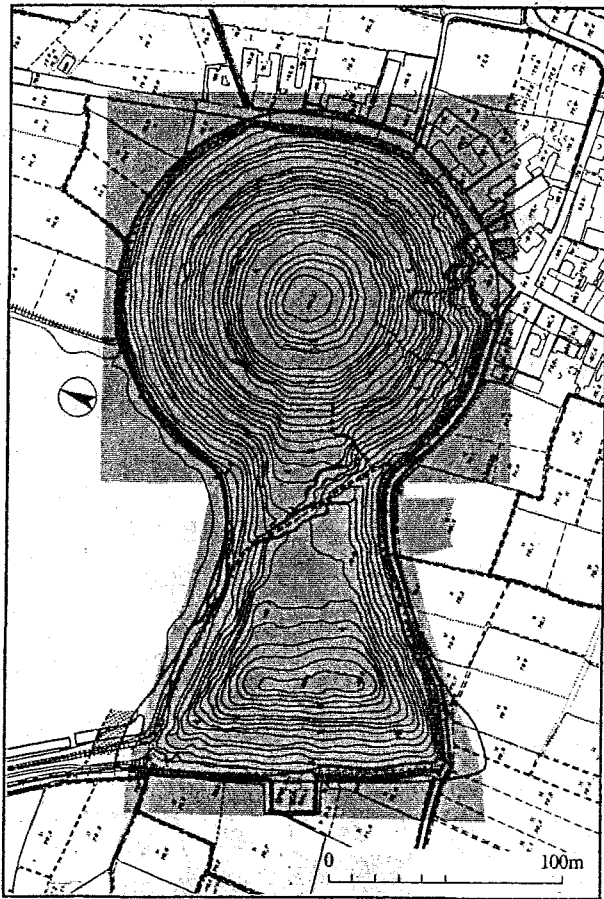
西求女塚古墳 墳丘復元図



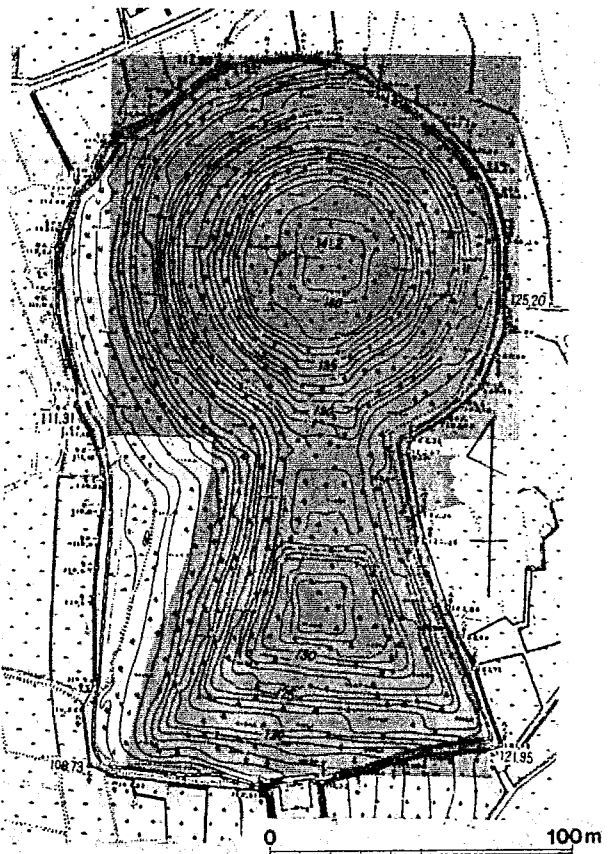
1 中山大塚古墳 (奈良県)



2 元稲荷古墳 (京都府)



3 箸墓古墳 (奈良県)



4 西殿塚古墳 (奈良県)

西求女塚古墳と前期古墳の墳型比較

※網点が西求女塚古墳 (縮尺不同)

引用文献

1. 『下池山古墳・中山大塚古墳発掘調査概報』学生社
2. 『京都府文化財調査報告』第23冊 京都府教育委員会
3. 『古墳とヤマト政権』文春新書
4. 『古墳の航空大観』学生社

(西求女塚古墳は1/1000)

Q. 西求女塚古墳には、誰が葬られているの？

A. 古墳に葬られた主のことを被葬者^{ひそうじや}といいます。普通この被葬者のことは名前なども含めて伝えられていません。

当時まだ文字というものが普及していませんし、一般の人々にとって被葬者は偉い人で、恐れ多いことなので名前をださないでその場所を呼んでいるうちに忘れ去られていったようです。



今となっては、出土した遺物などからその人物像を想像するしかありませんが、西求女塚古墳の被葬者は、三角縁神獸鏡^{さんかくえんしんぶつこう}をはじめとする青銅鏡を12面も持っていることからヤマト政権と関わりがあったと思われる。さらに山陰地方特有の土器も多く出土していることから、そちらの地方とのつながりも考えられます。

Q. 古墳に使われているたくさんの石はどこから運ばれたの？

A. 西求女塚古墳には、墳丘を覆う葺石^{敷いし}をはじめ、竪穴式石室^{たてあなしきしつ}やその周りに敷かれた礎石^{いし}など多量の石材が使われています。

『日本書紀』には、箸墓古墳^{しほりふね}に伝わる話として「大和と大坂の境から人々が並んで手渡して石を運んだ」というようなことが書かれています。そのまま事実かどうかはわかりませんが大変興味深い話です。

ところで西求女塚古墳では、葺石や基底石などはこの周辺でとれる花崗岩^{かこうがん}が使われています。また、石室の天井石に使われている石材のうち緑泥片岩^{りよくでいせん}は和歌山県や徳島県で、石英斑岩^{せいつはんがん}は猪名川上流^{なまがわ}の川西帯^{かわにし}近辺でしかとれないものですので、わざわざこの地まで運ばれてきたようです。

